

令和元年度 愛知地区 研究部会報告

愛知地区教育研究会学校図書館教育部会

今年度の愛知地区学校図書館教育研究会では、「紙芝居でつくる劇場」を演題に実演を交えて研修会を行いました。

日時 … 令和元年8月22日(木)
場所 … 豊明市立沓掛中学校図書室
講師 … 劇団三文芝居代表 柳澤 二郎 氏

講師の方の活動暦

講師の柳澤氏は、平日は会社員として働き、休日に舞台俳優として演劇を続けるかたわら、2015年から劇団三文芝居の代表として活動を始めました。地元日進市を中心に紙芝居の上演をされています。

紙芝居の時代における役割の変化

戦時中の作品である「アレグロ島攻撃」は、武器を用いた戦闘の様子から、国民の戦意高揚を目的に描かれたのに対し、「やまのひなまつり」は、ゆっくりとした和やかな場面が続く作品であることから、戦後の、日本の平和な様子を表しています。紙芝居は各時代背景に応じて作られ、聞き手に大きな影響を与えてきました。



紙芝居の上演で大切にしたいこと

(1) 読み手の立ち位置

柳澤氏は写真のように紙芝居の後ろに立ち、自身の姿を隠して上演されます。横に立つ上演方法もありますが、聞き手の視線が読み手へ流れてしまい、絵がもつ力をしっかりと伝えることができません。



(2) 読み手が楽しみ、熱をもって読む

紙芝居の後ろで読むことは、読み手の姿が見えないため、情景や登場人物の気持ちを身振りは使わずに、声だけで伝えなければならない難しさがあります。読み手が熱をもって読むことで、聞き手が話に集中し、作品に引き込まれる劇場的な空間をつくりだします。これは、日本の伝統芸能である落語に通ずるものがあると柳澤氏は話をされました。

講演を通して感じたこと

柳澤氏は実演を交えながら、紙芝居の時代における役割の変化や日本文化としての側面などを、丁寧に教えてくださいました。子どもたちはもちろん、私たち教員も紙芝居に触れる機会は少ないです。しかし柳澤氏の上演を通して、紙芝居のもつアナログの力と柳澤氏の演じる力に引き込まれていきました。聞き手を楽しませるには、ただ絵をめくり、文字を読みあげるだけではなく、読み手も楽しみ、役になりきることが大切であることを学びました。講演を通して、紙芝居の奥深さや影響力の大きさを実感することができました。

